

平成26年度スーパーグローバルハイスクール構想の概要

指定期間	ふりがな	ほっかいどうさっぽろかいせいこうとうがっこう				②所在都道府県	北海道
26～30	① 学校名	北海道札幌開成高等学校					
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	計	960名（各学年8学級：普通科6学級・コスモサイエンス科2学級）	
	コスモサイエンス科	20人	20人	15人	0人		
普通科	40人	40人	25人	0人	105人		
⑥研究開発構想名	さっぽろ発「Think globally, act locally」を実践するグローバル人の育成						
⑦研究開発の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・「雪・環境・読書」を切り込み口に地域の魅力や課題を見つけ、地球規模の課題と結び付けて探究する、人文・社会科学分野における「課題研究」の教育課程開発。 ・「課題研究」の充実に資するコミュニケーションスキル向上プログラムの開発。 ・課題探究的な学習成果の適切な評価方法の開発と高大接続の改善に向けた研究。 						
⑧研究開発の内容等	⑧-1全体	<p>(1) 目的・目標</p> <p>目的：「さっぽろ」で学んだというアイデンティティに立脚して、札幌市の考える国際的素養（「自ら課題を発見し、生涯にわたって学び続ける力」「自己を肯定し、多様な価値観を認め合う心の余裕」「未知なるものに挑戦し、自ら道を切り拓く勇氣」）を身に付けたグローバル人を育成すること。</p> <p>目標：研究開発の目的を達成するため、次の3点を目標として設定。</p> <p>① 課題研究が楽しいと思っている生徒の数が増える。</p> <p>② 将来の札幌や国際社会に貢献したいと思っている生徒の数が増える。</p> <p>③ 夢はかなうと思っている生徒の数が増える。</p> <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説</p> <p>現状の分析：</p> <p>① すでに自然科学分野における課題研究の教育課程開発は行われているが、人文・社会科学分野は未着手。</p> <p>② コミュニケーションスキルを高める必要がある。</p> <p>③ 日常の教科学習と課題研究の連携に課題がある。</p> <p>④ 大学受験との関係で最終学年における課題研究の取組に課題がある。</p> <p>研究開発の仮説：</p> <p>① 人文・社会科学分野における課題研究の教育課程を開発することで、課題研究に意欲的に取り組む生徒の数が増加する。</p> <p>② 「英語力」「対話力」「チーム力」の3つのコミュニケーションスキルを高めることで、課題研究が充実する。</p> <p>③ 国際バカロレア（IB）の活用により、全教科で課題探究的な学習を推進することで課題研究との連携が深まり、課題研究がより一層充実する。</p> <p>④ 課題探究的な学習の学びの成果が大学への接続に結びつくことで、安心して課題探究的な学習に取り組む生徒が増加する。</p> <p>(3) 成果の普及</p> <p>各市立高校との連携による他の市立高校への成果の普及。</p> <p>札幌市教育研究推進事業における市立小中学校への成果の普及。</p> <p>札幌市教育センター主催の教員研修講座における市立学校教職員への成果の普及。</p> <p>公開教育実践研究発表会の開催による広範な市民に対する成果の普及啓発。</p> <p>学校ホームページを通じた社会全般に対する成果の普及。</p>					

<p>⑧ -2 課 題 研 究</p>	<p>(1) 課題研究内容 実施内容：雪・環境・読書を切り込み口として札幌・北海道の魅力や課題を地球規模の課題と結び付けて研究し、提言にまとめ発信する。（人文・社会科学分野における課題研究の教育課程開発） テーマ例：「【雪】雪がもたらす豊かさとは（札幌と異なる様々な地域との比較調査を通して）」 「【環境】様々な文化背景を持つ人々が共存する社会とは」 「【読書】知を身近に感じるための人のつながりとは（先人の知を通して『さっぽろ』を知り“Think globally, act locally”の実践をする）」</p> <p>(2) 実施方法・検証評価 実施方法： 【第1ステージ：課題研究基礎】地域の特性を学び、その魅力と課題を探る体験学習やグループワークを実施。←地域や企業等との連携・交流による「ほんもの」体験を重視。 【第2ステージ：プロジェクト研究】雪・環境・読書を切込み口とした地域と世界を意識した具体的なテーマに関するプロジェクト研究を行い、その成果を「世界冬の都市市長会」等において「まちづくり」提言として発表。←企業や大学生の支援によるフィールドワークなどを重視。 【第3ステージ：個人課題研究】プロジェクト研究を発展させ、地球規模の課題を考察する個人研究を行い、その成果を英語の論文にまとめ各種コンクール等に応募。←海外研修でのフィールドワークや海外生徒との調査研究交流。 検証評価：生徒・教員・保護者対象のアンケート調査や国際バカロレア（IB）の評価方法を活用した成果物の評価により検証。 ※連携先大学・企業等：小樽商科大学、パリ国際学校（IB校）、ベトナム・ハノイ高校、ポータルランド市教委（調整中）、TSUTAYA（CCC）、（株）植松電機、北海道ガス（株）、クリプトン・フューチャー・メディア（株）、</p> <p>(3) 必要となる教育課程の特例等 ・編入6年：「グローバル探究」（1単位）→理数「課題研究」の代替</p>
<p>⑧ -3 上 記 以 外</p>	<p>(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価 ① コミュニケーションスキルを高める教育プログラムの開発 実施内容：課題研究の充実を図るため、英語を活用する機会、異なる価値観や文化を受け止めたり考えを伝えあったりする機会、多様な価値観を持った人たちが集まって物事を成し遂げる機会等を増やす。 実施方法： 【英語力】外国人指導者、Skype等での国内外の人々との交流機会の創出。 【対話力】疑似的に多様な価値観を体験する機会を学校内に作り出すドラマ教育やワークショップの実施。 【チーム力】チームビルディング研修の実施。 検証評価：大学や企業が求める生徒の資質やスキルを把握したうえで、IBのMYP・DPの評価方法・評価規準を基に、学校独自のルーブリック評価で検証。 ※連携先大学等：パリ国際学校（IB校） ※連携協力者等：NPO法人ミラツク黒井理恵理事</p> <p>② 高大接続の改善に資する、課題探究的な学習の適切な評価法の開発 実施内容：課題研究のベースとなる各教科の学習において、課題探究的な学習を実施して、その学習成果の適切な評価方法を開発する。 実施方法：ルーブリックを用いたIB評価の実践研究、eポートフォリオなどを活用した評価資料（エビデンス）の開発。大学教員や企業等との定期的な研究協議の実施。 検証評価：開発した評価法の信頼性について大学関係者等から意見聴取を実施し検証。 ※連携協力者等：北海道大学高等教育推進機構飯田直弘准教授（教育学博士）</p> <p>(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等 なし (3) グローバル・リーダー育成に関する環境整備、教育課程外の実施内容・実施方法 ・ICT環境の整備（無線LAN環境）によるタブレット端末の活用。 ・外国人指導者を活用した日常的に英語を活用できる環境の創出。 ・IB認定校を目指すことで、すべての教科で課題探究的な学習を実施。</p>
<p>⑨その他 特記事項</p>	<p>平成27年度からの中等教育学校への改編を活用し、開成高校生、中等教育学校編入生、中等教育学校新入生の3タイプの教育課程による取組の比較検証も実施する。</p>

ふりがな	ほっかいどうさっぽろかいせいこうとうがっこう	指定期間	26～30
学校名	北海道札幌開成高等学校		

平成26年度スーパーグローバルハイスクール 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定 (アウトカム)								
	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(32年度)
自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数								
a	SGH対象生徒:		人	人	人	人	人	360 人
	SGH対象生徒以外:		-	85 人	人	人	人	296 人
目標設定の考え方: 卒業時点の目標値を、高校生60%、編入生75%、新入生100%とした。								
自主的に留学又は海外研修に行く生徒数								
b	SGH対象生徒:		人	人	人	人	人	48 人
	SGH対象生徒以外:		30 人	61 人	人	人	人	36 人
目標設定の考え方: 卒業時点の目標値を、高校生20%、編入生20%、新入生30%とした。新入生をカウントするため一時的に人数は下がる。								
将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合								
c	SGH対象生徒:							50%
	SGH対象生徒以外:		-	31%				42%
目標設定の考え方: 卒業時点の目標値を、高校生40%、編入生40%、新入生100%とした。新入生をカウントするため一時的に割合は下がる。								
公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数								
d	SGH対象生徒:							40 人
	SGH対象生徒以外:		-	0 人				32 人
目標設定の考え方: 卒業時点の目標値を、高校生10%、編入生10%、新入生20%とした。編入生の対象生徒が少ないため対象外より少ない時期がある。								
卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合								
e	SGH対象生徒:							100%
	SGH対象生徒以外:		8%	13%				100%
目標設定の考え方: 対象生徒(高校生30%、編入生30%、新入生100%)対象生徒外(高校生20%、編入生25%、新入生100%)とした。								
年間40冊以上の本を読んでいる生徒の数								
f	SGH対象生徒:							280 人
	SGH対象生徒以外:		-	115 人				280 人
目標設定の考え方: 卒業時点の目標値を高校生30%、編入生30%、新入生100%とした。編入生の対象生徒が少ないため対象外より少ない時期がある。								

1' 指定4年目以降に検証する成果目標									
		24年度	25年度	29年度	30年度	31年度	32年度	33年度	目標値(33年度)
文部科学省が支援する国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合									
a	SGH対象生徒:								20%
	SGH対象生徒以外:	14%	14%						14%
目標設定の考え方: SGHの取組みにより、現行よりも若干増加。									
海外大学へ進学する生徒の人数									
b	SGH対象生徒:								10人
	SGH対象生徒以外:	0人	0人						5人
目標設定の考え方: SGHの取組みとIBプログラムの導入により、現行よりも若干増加。									
SGHでの課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合									
c	SGH対象生:	-	-						100%
目標設定の考え方: SGH対象生徒は様々な体験を通して、課題研究的な学習を実施することで何らかの影響を受けるものと考えられる。									
大学在学中に留学又は海外研修に行く卒業生の数									
d	SGH対象生徒:								40人
	SGH対象生徒以外:	-	-						92人
目標設定の考え方: SGH対象生徒/SGH対象生徒以外を、高校生25%/10%、編入生40%/20%、新入生50%/30%設定。									

2. グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット）								
	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(32年度)
a	課題研究に関する国外の研修参加者数							
	人	82人						144人
	目標設定の考え方：現状が8.5%、SGH導入により10%を見込み、中等生は15%を見込んだ。							
b	課題研究に関する国内の研修参加者数							
	人	48人						96人
	目標設定の考え方：現状が5%、SGH導入により7%を見込み、中等生は10%を見込んだ。							
c	課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数							
	校	3校						20校
	目標設定の考え方：現状が3校、SGH導入により4校増(フランス、オーストラリア、米国、ベトナム)、その後IB校等の連携を見込んだ。							
d	課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)							
	人	176人						250人
	目標設定の考え方：現状の人数を参考に、『課題研究基礎』・『プロジェクト研究』に参画する大学教員及び大学生を見込んだ。							
e	課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)							
	人	29人						150人
	目標設定の考え方：新校舎のメディアセンターや国際交流センター(仮称)の整備、コミュニケーションスキル育成の研修に参画予定。							
f	グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数							
	人	0人						80人
	目標設定の考え方：最終学年の生徒全員が『個人課題研究』の論文を基に公益性の高い大会に参加することを見込んだ。							
g	帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む。)							
	人	1人						15人
	目標設定の考え方：中等に改編後は、学年に平均2人を想定した。32年度はDP完成年度。							
h	先進校としての研究発表回数							
	回	0回						2回
	目標設定の考え方：平成32年度はDP2年目となるので2回と見込んだ。							
i	外国語によるホームページの整備状況 ○整備されている △一部整備されている ×整備されていない							
	-	△						○
	目標設定の考え方：中等に改編後はIB認定校を目指す学校として外国語によるホームページを整備する。							
j	家庭でホームステイを受け入れたことのある生徒の数							
	-	2人						20人
	目標設定の考え方：課題研究の取組により、ホームステイの受け入れる家庭が段階的に増える見込んだ。							

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度
全校生徒数(人)	960	961	0	0	0	0	0
SGH対象生徒数							
SGH対象外生徒数							

* 表の数字は (高校生/編入生/新入生)の順